

特集

再録

# 板金いま、むかし

— 鴨下松五郎氏に聞く(上) —



組合旗の入魂式にて(昭和3年ごろ、東京・赤坂)

金属屋根の世界は「長尺」の素材が供給されるようになってから大きく変わりました。これは屋根の形式や技術だけでなく、業界で生活する人々の「暮らしぶり」にも言えることかもしれません。しかし、現在の金属屋根は「長尺」以前からの技術や経験、そしてその時代の人々によって育て上げられてきたものです。そこで、今月は東京の業界の長老である鴨下松五郎氏に「板金いま、むかし」と題してお話をうかがいました。

※本稿は、平成7年4月号(No101)から4回に分けて掲載したもので、板金業界初期の事情が良くわかるものとして好評をいただきました。その後再録の希望もあり、この度ご要望にお応えして再編集し、2回に分けて掲載いたします。

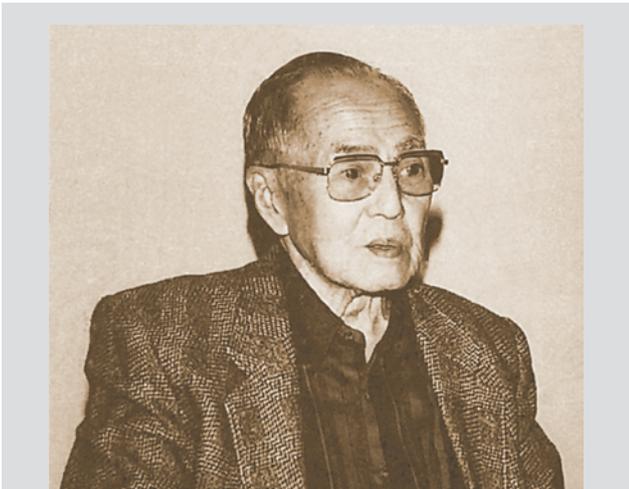
## ト口

昔の話をして欲しいということなんで、まず材料の話から始めましょうかね。我々板金屋は昔は材料にそれは苦労させられましたから。これは皆さん聞いたことがあるとは思いますが、石油缶を開いたものをだいぶ使いました。石油缶はハンダで付けてありますから、それを火で温めましてね。口のところからポンポンと叩いて抜いて、切り開いて作ったものです。これを屋根や樋に使ったものです。

開いたところは、ハゼがありますから樋などを作る際は「ふち巻き」は出来ませんでした。せいぜい「アダ

折り」ぐらいしか出来ない。それと「口」に当たる部分、ここも使いました。「口」には穴がありますから、そこに細工をして穴を塞ぎましてコールタールを塗ってしまうんです。これを使って屋根を菱葺きにしました。当時は「天地葺き」と言っていました。既にコールタールが塗ってあるから、「雨が漏らない」ってことで、垂木に直接釘で留めていました。

これは自分たちで作るのではなくて、専門に売っているお店がありましたから、そこから買っていました。東京の小伝馬町に「金物通り」という所がありまして、そこにあった「村山」というお店が専門に扱っていましたので、よく買いに行きました。店先に



鴨下松五郎氏(故人・平成13年4月14日逝去)  
1907年(明治40年)生まれ。  
勲六等单光旭日章、労働大臣卓越技能章、  
日本銅センター章などを受賞。  
聞き手 大江源一氏(本誌編集委員・現広報委員長)

開いたものがうず高く積んでありましたね。

もとは石油缶ですから、開いたままの物は油だらけです。その油の付いた物と洗ってきれいにした物と2種類を売っておりました。油の付いた物は「トロ」と呼ばれてました。当然洗った物のほうが高いわけです。3銭から5銭ぐらい違ってたんじゃないでしょうか。

## 厚さは、重さ

銅板はメーカーでは「やまいち」今の古河さん、それから住友さんでしたね。住友の板は「ねばり」がありました。ですから「打ち込み」や「打ち出し」にはほとんど住友の板を使っていました。ただ、色はあまりよくなかったですね。銅板はやはり、小伝馬町にありました「栗谷」「山崎」「市川」といったお店が扱っておりました。

今のような長尺は勿論ありませんから、12巾×4尺(363mm×1203mm) 15巾 ×42寸(455mm×1273mm) 2尺巾×42寸(606mm×1273mm)といったサイズのものでした。「山崎」さんでは「菊富士丸板」といって1尺×12寸(303mm×363mm)の銅板を出しておりましたね。これは「瓦板」と言われていました。

厚さは40目(め)、50目、60目、70目、80目とありました。70目は今で言う0.35mmぐらい、80目で0.4mmといったところでしょうか。80目はほとんど使わなかったですね。厚さは重さで現していたんです。昔は圧延技術が良くありませんでしたから、一枚の板でも場所によって厚さが違っていたくらいですから、厚さを正確に表現することが出来なかったんで、だから目方で現していたんでしょうね。ですから、買う方も1枚、1枚手で持ってみて、重そうな銅板を買ったりしていました(笑い)。

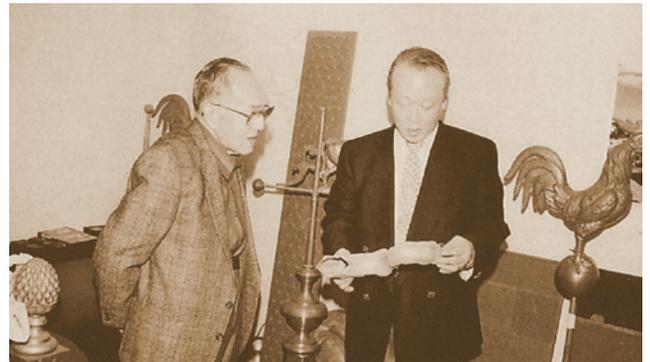
## 銅板を厚くみせる

中には銅板の裏に紙を張って厚くみせているような物もありました。誰が考えたのか分かりませんが、これは始末に終えませんでしたね。裏にすぐ水が入ってきてしまいますから。少しでもいい物に見せて高く売りたいかっただけでしょうが、今から考えるとひどい物でした。

もっとも、私らのほうも現場に言って「銅板を少しでも重く見せろ」ってんで、重そうに運んだり、板を折る時も「厚いものを折っているように見せろ」なんて言われてましたから、どっちもどっちかも知れませんが……(笑い)。何とかごまかして儲けようとしていたんでしょ。これも板金屋のテクニックです(笑い)。

## ならし屋

当時の銅板はとにかく「ひずみ」が多かったですね。買ってきてすぐの物でも、一方の角を押すと反対側の角が上がってしまう。そういう「デコボコ」の板でした。こんな板を使いますと、例えば「流し」などにすぐに水が溜ってしまいます。使いものにならないような奴でしたね。そういう物が正式に売られていました。



仕事によっては、……この仕事は関東大震災直後にやったものですが……日本家屋の「ひとみ」、鴨居の大きいやつですね、それとその両側の柱に銅板を張る場合などはどうしても平らな物が必要になる。その時は「ならし屋」さんに頼みました。板を均して、平らにするのを専門に扱っていた所です。今の岩本町あ



たりにありまして、5人か6人職人さんがいました。

これはすごい技術でした。板を置きまして叩くんですが、見ておりますと関係のない「あさって」のほうを叩くんです。とんでもない所を叩くんですが、板がスーッと平らになっちゃう。勿論「槌」の跡は付きますが、それは見事でしたね。技術とはこういうものだと思います。

## 銅板は昔のほうが丈夫？

それと長さの足りない板が多かったですね。巾は割合と正確なんですけど、長さが4尺といっても一分ぐらい詰まっていたりとか。それと角が「矩(カネ)」（直角）になっていない銅板も多かったです。昔の板金屋は「差し金」は使っていませんでした。「竹尺」でしたから「矩」を見るのは銅板なんです。銅板で「矩」を見て、それから切っていました。その時にもとの銅板がズレているととんでもないものが出来上がるわけです。これも困りましたね。折って張っていくうちに曲がってきちゃいます(笑い)。

今の技術では信じられないのですが、そういう物が現在も出回っています、1ケース全部違っているようなこともあります。今は機械がいいですから銅板の寸法が多少違っていても、それなりに折れてしまいます。ですから葺く時に正確にズレて行きます。今の人は材料の寸法が違っているとは思っていませんから、葺き上げてみて「おかしいなあ」と思うぐらいかも知れませんが、気を付けたほうが良いと思います。

ただ、銅板そのものは今より丈夫だった感じがします。今の銅板は、銅の成分が99.9……%という格好で、不純物をほとんど抜いてしまっていますが、昔の銅板は金や銀といった不純物を含んでいました。素人考えですが、私はそういう銅板のほうが屋根などの使った場合、丈夫なんじゃないかと思っています。勿論今は酸性雨とか大気汚染とかあり、銅板だけの理由で腐食するわけではないんですが……。湯島の天神さんなども100年以上たってますし、そういう古いものを見てきた実感ですね。

もっとも、そういう銅としては少し不純な物を作ってもらおうと思っても、私ら板金の世界で使う銅の量など、電気やその他の世界から見ると微々たるものですから、難しいでしょう。

## 下地と下葺きが大切

銅板の世界では日光の東照宮とかが古い物としては有名ですが、板金屋にとって技術的に見るべきものはあまりないですね。結局、中国瓦と同じでU、Oの板を並べていくだけです。古い銅板の屋根を剥がして見たことも何回かありますが、ほとんど切りっぱなしです。技術的にはどうってことありません。

ただ、下葺きはすごいですね。全て檜の「トントン葺き」です。安いのは「どうがえし」といって重ねの少ない方法…重ねが板の長さの半分ぐらい…を使っていたんですが……。トントン葺きの重ねのところが板の長さの2/3ぐらい重ねていました。これだけでも50年、60年持つような感じですね。その上に銅板を葺いていくわけですから、ハゼを使わず重ねてやっただけで漏らないし、今でも持っているものが多いんです。水は確実に浸透していると思いますが、下葺きがいいので今まで持っていると考えています。

東京近辺ではハゼのやり方で、「つかみ込み」と「切り子」があります。私に言わせりゃ、どちらでもいいんです。ハゼなんてものは、どちらにしる穴だらけのものですから水は入ってきます。自分のいいと思ったやり方をすればいいんです。勾配が速ければ「つかみ込み」でも「切り子」でも水は入りませんが、勾配がのろくて雨量が多ければ水が浸透するのは当たり前。ですから屋根というのは漏るものだと思って下葺きに重点を置かなければ駄目です。

## 泥なまし

少し話がずれましたが、銅板というのは非常に使い道が良い材料なんです。昔目黒に軍隊の火薬庫がありまして、その仕事を受けたことがあります。窓の縁を全部銅板で巻く仕事です。鉄は釘を含めて一切使ってはいけないんです。鉄は火が出ることが多いというわけです。金槌で打っても火花が出るぐらいですから、事故につながるということだったんでしょうね。釘も当然、銅釘です。

銅釘では神田の「鋳定(びょうさだ)」さんでした。これは古いお店で、私らの子供じぶんからありました。今でもあります。今の判子を売っているような回転する箱がありまして、その中に鋳が入っていました。小学校に行っているときなんか、親父に随分買いに行かされました。この箱は今でも「鋳定」さんに置いてあります。

銅板は高いですから、普通の人ではなかなか使えないんです。そういう材料ですから、屋根から剥がした物も再利用してました。その時は「泥なまし」というやり方をしてました。正しくは「泥塩なまし」と言っていたかもしれませんが、職人は「泥なまし」と言っていました。昔の人は良く考えたと思いますが、泥1升到塩を同じく1升混ぜまして、それを銅板に塗ります。その銅板を火の中に、放り込むわけです。塩気があるからきれいになるのだろうと考えたのでしょかね。つまり「なまし」のなら少しでも銅板をきれいにしようとしたんでしょうね。

火から出しまして塩と泥を洗うと色はきれいになっていました。そして「四すみ」を切りまして、また屋根に張っていきました。



### あか板、くろ板、銅板……

高いと言えば、昔は手間より材料が高い時代でしたから、職人さんが材料を懐に入れちゃうことが結構ありました。銅板は特に高いですから、うちの若い者がある時に銅板を細く切りまして、お腹に巻いて逃げちゃったんです。まあ泥棒です(笑い)。逃げ切れればよかったんですが、警察に捕まっちゃったんです。うちの親父が警察に呼ばれまして、職人は「あか(赤板)」と言ったんですが、親父は銅板と言った。そしたら警察では「どっちなのだ?」「それとも両方やったのか」となって、怒りだしてしまった。同じものだって説明しても「お前達はそういう二つ言葉を使うから駄目なんだ」とかなんとか、親父は困っちゃったらしいですよ。銅板のことは私ら「くろ(黒板)」とも言っていましたから、そう言ったらどうなったんでしょう

うね(笑い)。

### 鉄は毒じゃない

材料では他に、すず引きのブリキ、亜鉛鉄板などがありました。それと戦後すぐはジュラルミンが出回った。物がなかったので飛行機で使っていたジュラルミンが大量に出てきたので飛びついたんですが、これがどうにも硬くて、なましたって、何したってどうにも使えない、困りましたね。いろんな材料を使ってきましたが、苦労はさせられました。こういう面では、今は有り難いですね。

まずブリキは、今の厩橋のあたりに、専門で扱っているお店が5軒か6軒あったと思います。新聞の一面に当たる大きさのものが「2枚がけ」、二面の大きさに当たるのを「4枚がけ」と呼んで売ってました。私らのほうは「2枚がけ」何枚、「4枚がけ」何枚とって買ったものです。「2枚がけ」は小さいですから、あまり使い道はありませんので、「4枚がけ」をよく買いに行きました。

何を作っていたかと言いますと、お弁当屋さんの味噌汁入れなどです。当時はお弁当屋さんが、車を引いて売り歩いていたのですが、味噌汁も缶に入れて持ち歩いていた。その味噌汁入れを作るには、亜鉛引きのトタン板では駄目なんです。トタンはすぐハンダが切れちゃいますから。その点すず引きはハンダはとれません。こういう缶を「4枚がけ」でよく作りました。

ハンダは良く付くのですが、そのかわりブリキはトタンに比べて錆びるんですよ。味噌汁は塩そのものですからね。そうするとどうなるかと言うと、弁当屋は「鉄をわざわざ飲む奴もいるんだから大丈夫だ」「鉄は毒じゃない」ってね。毒じゃないっても錆びが出ればね……もっとも飲む方も「鉄は毒じゃない」なん

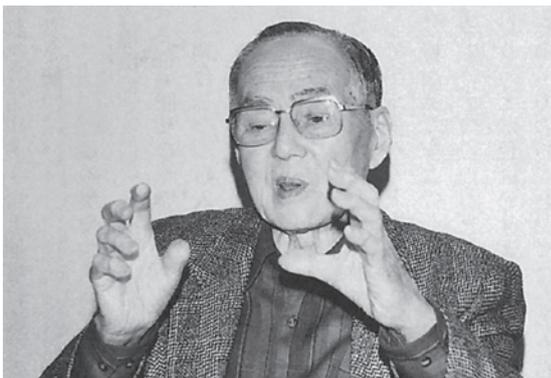
て言って飲んでましたがね(笑い)。

## 鴨下さん困るよ……

ブリキもそうですが、亜鉛鉄板も輸入物が多かったですね。「英板」「米板」と呼んでいました。これが硬いんですよ。ハゼをつぶす時にソーッとつぶさないと折れてしまう。そこでね「つかみ」をもって材料屋さんに行くわけ。試しにつかんでみて折れないやつを買ってくるんです(笑い)。材料屋さんも困っちゃいますよ。売れなくなりますから。ですから「鴨下さん困るよ……」となります。当たり前です(笑い)。そういう迷惑をかけたお店が金物通りの「紀繁」さんや浅草橋にあった「佐野」さんです。

亜鉛鉄板の厚さは「8枚割」「10枚割」とか呼んでいました。これも銅板と同じで目方からきている表現です。一つの梱包に何枚入っているかで厚みを現わしていました。「8枚割」は28番、0.5mmですか。そういう物を使ってストーブの煙突なんかを作りました。暮れに入りますと注文が多くなりますから、ガンガンやってました。当然近所じゃうるさいから文句を言ってきます。ところが当時の職人は乱暴でしたから、グズグズ言われるとね「てめえら後から来やがったんだろ」って、夜中でも遠慮なしにやるわけ(笑い)。ご近所はたまったものじゃありません。

それから米板で「アポロ」という製品がありました。これはいい物でしたね。メッキが厚くて、表面がきれい鏡みみたいな板でした。28番以上だったと思います。これは「流し」などによく使いましたが、最高級品という感じでしたから、どうしても使わなければいけない時にしか使えませんでした。



## ハンダの付かない亜鉛鉄板

これは戦後だいぶ経ってからの話なのですが、あるメーカーの亜鉛鉄板でハンダが付かなくなっちゃったんです。板金屋としてはハンダの付かない亜鉛鉄板では仕事になりません。亜鉛が寄ってしまうのです。メーカーさんに困るということを申し上げたら、一度工場に来てほしいということで、組合の人と一緒に

に行きました。「お宅の板はこうです」と現物を見せて「ハンダが付くような物をこさえてほしい」と申し上げました。最初は「こんなことが……」ってメーカーさんの方では半信半疑の感じでしたが、「申し訳ないが我々の業者はハンダの付かないものは使えない」って色々申し上げたんです。そうしたら工場を見て気がついたことがあったら指摘してほしいと言うので、工場を見せていただきました。

めっきをする前に板を洗浄する際に、相当枚数を重ねて槽の中に入れて洗っておりました。板は密着しているので相当時間をかけないとちゃんと洗浄出来ていないような感じでしたので、「めっきの表面はきれいなものだから、原因はそこじゃないですか」そう申し上げたんです。

後から「ご趣旨に添えるような製品にしました、ありがとうございます」とお礼が来ました。勿論ハンダは付くようになっていました。

## コールタールを雑巾で塗る

あとはお世話になった材料は、何とんでもコールタールですね。これは丈夫なもので、非常に役に立ちました。いまでも山梨あたりでコールタールを塗った屋根が残っています。50年、60年たったものですが、鉄板の方は錆びていて叩けばパリッと折れてしまうような感じですが、コールタールで屋根として持っている。

昔の板金屋の「小僧」はいつもコールタールの缶と七輪を腰にぶら下げて歩いていました。それほど良く使った材料です。ただ恰好は悪かったですね(笑い)。昔の職人さんにはすごい人がいました。コールタールは普通刷毛で塗るものですが、刷毛よりも雑巾の方が速いって雑巾で塗っていた職人がいたそうです。1日に100坪塗ったといいますが、そりゃ速いです。しかしこれはたまらないですよ。コールタールの中に手を突っ込むのですから……。

そのコールタールは今の日本橋の本町にあった「熊野屋」さんに買いに行きました。東京では一番の塗料屋さんでした。それこそ何でもありました。

## 地の粉

雨漏りがしたら張り替えればいいのだけれども、材料が高くて簡単には出来ません。今ならシーリングで良いものがありますが、当時はそんなものはなかった。どうしてかと言うと「地の粉」というのがあって、これをコールタールと適度に混ぜたものを使っていました。

これを混ぜるのがやっかいなんです。「面倒くさい」って一度に入れると、掻き回せなくなっちゃう。少しずつ調合しながら入れていくのですが、夏の時期

ならばポタッと垂れない程度とか、練り具合の感じが難しい。その出来具合で職人の腕が分かるとも言われてました。時にはあと少しで出来上がりとなるとき、ちょうど粉が無くなってしまいます。困っちゃって、その辺の泥を入れてごまかしたり、とか色々ありました。

その「地の粉」を混ぜたものを布に浸み込ませて雨漏りの箇所につき、その上にコールタールを塗って補修していました。雨漏りを止める材料は、これしかありませんでした。そのかわり良く止まりました。

「地の粉」を塗る時使う布は、着古した浴衣を細長く裂いて作り、包帯のような感じで巻いておきます。布地ですから裂いたときに多少ケバ立ちます。これを火で焼いて滑らかにしておりました。ケバ立っていると屋根に貼った後そこからめくれてきちゃうんです。これも「小僧」の仕事で、仕事から返ってきたあと夜業(よなべ)で作ってました。今はこんなとほけた仕事はありませんね。

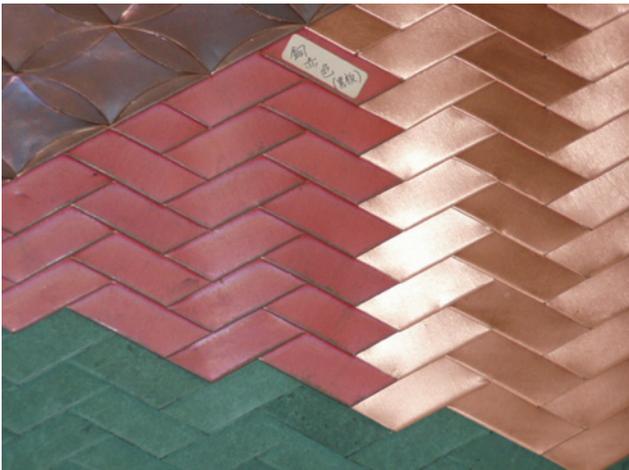
それと、麻の紐をばらして「地の粉」に混ぜていました。これは土壁の泥にワラを入れるのと同じで、「地の粉」が割れるのを防ぐという話しでした。実際に効

果があったか、どうだか分かりませんが(笑い)。「地の粉」もあまり厚く塗っちゃいけない。適度に塗って貼付て、その上にコールタールを塗って、補修した箇所を分からないようにしてました。

## 「洋ちゃん」

漏り止めには、もう一つ松やにを油に混ぜたものを使っていました。油は何でもよかったですと思いますが、当時は「とばし油」と言っていたと思いますが、今でいう菜種油を使ってました。松やには日本の物の方が品質がいいんですが、採れる量が少ないので高い。そこで輸入したものを使ってました。「洋ちゃん」と呼んでましたね。西洋ものという意味だったんでしょうね。これもさっきの「地の粉」と同じで練り具合が難しい。

これは看板の足元なんかに使いましたね。足元のところに流し込むんです。そうすると、油が入っていますから芯まで固まらないのです。固まらないから看板が動いても、その動きに追従して水の浸透を防げるという仕組みでした。



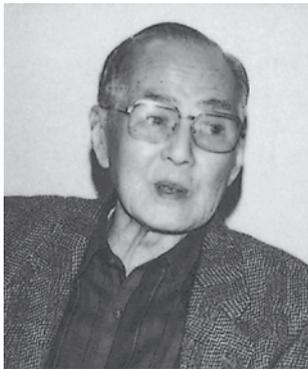
銅板の屋根には「地の粉」を使えませんでしたので、これを温めて薄く伸ばしたものを塗っていました。この時は刷毛でなく雑巾を使っていたように思いますね。

銅板に何か塗るといえば、銅板の艶がなくなるとまずいってんで、昔の板金屋の中には、「そんなことやっちゃ駄目だ」って言ったんですが、黒砂糖を薄めて塗った人がいました。そりゃテカテカ光って具合はよかったですよ。しかし、虫がついちゃって……（笑い）。こんな馬鹿な仕事をね、馬鹿と思わずやってたんですよ。ただ、この人は馬鹿でなく研究家なんです。どうしたら銅板がきれいになるかと考えていたんでしょうね。それまでの技術を脱皮しよう、脱皮しようとしていたと思います。今から考えると馬鹿な仕事ですが、こういう人のほうが研究心があったように思えますね。

お話しした「地の粉」も「洋ちゃん」も東京の田端にある「浅井工業薬品」さんにいけば今でも手に入ります。

## 「ぶったくり」

今では道具というのはどこでも買えますが、私らのじぶんは何と言っても神田の「久光」さんでした。現



在の機械屋さんや工具屋さんで「久光」さんの出身というところが結構あります。そこで売っている道具は、切れ味が良くてね。職人が使って使い良いものでした。薄刃でもなんでも非常にいいものを出していました。ただ、注文してから手に入るのに3ヵ月くらいかかりま

した。「房州」の方で作らせたと聞いてます。値段もほかの店の3倍ぐらいはしてましたが、それだけ価値のあるものでしたね。

寸法とりは「ぶったくり」と言いまして、長いものを持って行って現場で寸法に合わせて切ってくるやり方をしてました。これは絶対に間違いがなかったです。ね。「ぶったくり」とか「あてさし」と呼んでました。

寸法をとろうとしても正確に計れなかったり、寸法の読み間違いが多かったんでしょうね。そもそも昔は字が読めなかったり、書けない職人さんが多かった。うちの親父の兄弟分に「牧野茂八」という人がおりましたが、この人は名人なんです。字が書けなかった。そこで二つ、三つの寸法は「飲み込む」と言っていました。寸法を自分の眼で見て覚えちゃったと言うんです。それで通称「飲込みの茂八」って言われてました。でもね、三つぐらいまでは何とか覚えられますが、四つ、五つになると覚えられなくなっちゃって（笑い）……どうしても間違いが起きる。ですから、それから先は「ぶったくり」専門です。

寸法の関係で言えば展開図。これはうちの親父が若いじぶんに「洋行帰りの山田さん」に教わったと言っていました。その山田某さんは洋行して展開図のやり方を勉強してきたという話でしたが、おそらく洋行なんかしちゃいない（笑い）。洋行はしていないが、そういう知識を持った人がいたことは間違いのない。ただ、展開図は好い加減なものを引いたんでは合いませんし、私らは実際の仕事では展開図はほとんど使いませんでした。

## マン・チョウ・ミイ

材料の話はこの辺にしておいて、次は仕事の方のお話をしましょうか。昔は板金屋にも符丁（ふちょう）があったんですよ。どういうものかと言いますと……ダイ(1)ジョウ(2)マン(3)キイ(4)ミイ(5)セイ(6)チヨ



ウ(7)キュウ(8)エイ(9)そして10はダイにもどる、といったものです。

親父によると、明治の終わり頃の東京の板金屋の手間が1日、37銭5厘だったそうです。これ

を符丁で言うと「マン・チョウ・ミイ」となるわけです。これが関東大震災(大正12年)頃になりますと1円から1円50銭ぐらいになってました。屋根の張り手間が請負で1坪当たり40銭から50銭ぐらい。当時は18歳ぐらいでしたが、自分で言うのも何ですが結構いい手間を取ってましたね。

例えば二人で1日に24坪葺いたことがあります。20歳前ぐらいのころだと思いますが、この時は鯉節で有名な「ニンベン」の営業所の屋根の仕事で、屋根は一文字葺きでした。たしか29番(0.35mm)の3×6板の四つ切りだったと思います。ハゼは「切り子」です。普通は0.27mmをよく使ってましたから、当時としては厚いものを使った仕事でした。これを朝の7時頃から現場に行き材料を切ることから初めて、それを折って、屋根に張っていったわけです。

一緒にやったのは小松川の奴でした。腕自慢の奴でしたので「張りっこしよう」って。屋根を張る競争をするわけですからお互いに相手を「煽ってやろう」という感じで張っていきました。29番を2枚いっぺんに折ったり、板を切る時も「はさみ」だって動かさずに、板に「はさみ」をクッと入れてそのまま強引に押し込んで切っちゃいました。それだけ力もあったんでしょね。

## 材木が縮む、銅板が縮む

少し手間の話をしますと、樋の「あんこう」は一個で樋1間分の値段を取ってましたね。それと小田原の「切り鬼」というものがありますが、これを一人で作ると1個、5円ぐらいになりました。手間が1円50銭の

頃でしたから結構なお金です。「切り鬼」の作り方は、うちに4～5人小田原から手伝いにきてくれていた人がいまして、その人達に教わりました。

この仕事が関東大震災後東京でもかなり多くなりまして、それで仕事から帰ってきて夜業(よなべ)に1日に1個ぐらいこさえました。若いじぶんでしたから、さんざん仕事をしてきた後の夜業も平気でした。そんなわけで「切り鬼」には随分稼がせて貰いましたし、鬼のデザインを変えたりとか作ることも楽しみでした。

看板とか戸袋の仕事もよくやりました。看板は今で言う既成品のような物がありまして、それを売ってました。金物通りの「村山」さんの隣に看板屋さんがありまして、そこから木彫りの看板に銅板を張る仕事をよく頼まれました。昔はこういう看板でいいものがありましたね。子供じぶんからよく見せに連れていかれたのは、本郷3丁目の四つ角にあった下駄屋さんの看板です。この看板には大きな下駄を銅板で張ってありました。下駄の鼻緒はだんだん太くなるでしょ、それを銅板で実に見事に張ってありました。名前は忘れてしまいましたが、当時の名人が張った仕事というので、よく見に行きました。

「ひとみ」や戸袋を銅板で張る仕事がやはり関東大震災後多くなったのですが、「ひとみ」の場合大きいですから銅板一枚の幅では足りない。そこで、裏から幅20mmでテープを貼るようにハンダ付けていきました。表からは一枚の銅板で仕上げたように見せるわけです。ただ、銅板には伸縮がありますから、あとで切れちゃうことがあります。

昔の人は伸縮なんか全然考えていませんから「板が縮む」と言っていました。材木が縮むことで銅板が切れるという理屈です。うちの親父なんかも大工さんに向かって「古材屋に行って古い板を買ってきて、それでやってくれないと皺が出ちゃう」なんて言っていました。板金屋は木が縮むことは知っていましたが、金気(かなげ)の物が伸び縮みするなんて思ってもいなかったから、銅板が切れたとなると「古い木を使わないからこうなっちゃった」とか言って、大工さんに責任を押しつけて威張ってました。もっとも大工さんも銅板が伸縮することなんか知りませんから「それは申し訳ない」なんて謝ってましたね(笑い)。

(次号につづく)